

才女

多梅稚作曲



ひーとよーくひなのただならず
スーダレーカカグテモロコシノ



たーたくつまどはざわげども
クシキモウーカブコウロホウ



こころーばーすめるーつきかけに
メツキーグーモキニータカキナハ



ひーとのみちをばてらすなり
チトセノノチマアカチルナリ

才女

新保磐次

(一) 一夜水鶏の只ならず

敲く妻戸は噪げども

心はすめる月影に

人の道をば照すなり

(二) 簾掲げてもろこしの

景色もるかぶ香爐峯

立つや雲井に高き名は

千歳の後まで薫るなり

(轉載を禁ず)

後見送おきおくつて玄關げんくわんに出いでた教師けいし、遙はるかに彼等かれらの後姿うしろすがたをヂツト見みつめて居ゐたが、遽にはかに首かうをうなだれ、掌たなこもて額ひたのを蔽おほうた、……左ひだりの袂たもとより、ハンカチーフを取り出いだし、目めを押おし拭ぬぐひ、

「ア―彼等かれらの様やうな、不便ふびんなものを長く世話せわすれば、別わかれの情じやうも亦また一層いちじやうせつないものだ、斯かる時ときこそ人の眞ま情じやうは、顯あはるゝものだ、夫せれに付つても、アレが、最さい前ぜんの言葉ことばの様やうに、一生しやうじふ邪路よこみちに迷まよはずどうか立派りつぱな出世せを……」

と低ひくい聲こゑで、獨ひだりり言いを云いつた。

母のこころ

す み れ

天地あかづちの間に、生なきどしいけるもの、人は更さらにも云いはず、鳥獸ちゆうそくに至いたるまで、皆母みなの暖ぬくかなる心こゝろに、浴あせざるは、

あらざるべし、まかはあれども、富とめる人に比ひべては、貧ひんしきものゝかた、その心の切きなることは、まざりてなん見みゆる。我が宿近やどぢかく、車くるまひく事ことを營なりほとせる人あり、その日ひそのひの、たづきにも、事缺ことけつく有様ありさまなれば、まして三人さんにんまである、女の子おんなこの身の回まわりはりの、とやくべくもあらず、去年こぞのくれ、隣となりなる家の兒こらが、新あらたしき年の料りやうにとて、調しらへし衣いの、うるはしきを見、我われ子この上うへの思おもひやられてにや、狭せまき心に堪たへかねけん、母ははは遂すなはち病やまの床とこに、臥ふしたりき。

愚おろかなるに、似にたれども、教おしへなき婦女おんなにしあれば、さもありなんと、我われはいたく心をうたれたり。

我子われこ遠とほき國くににあるを、故郷ふるさとなる母君ははきみは、朝あな、夕ゆふな、神佛かみぶつに祈いのりて、我われが爲ために幸多さいたかれとのみ、願ねがひ給たまへり、さるは雁かりの便づかりに事寄ことよせては、怪あやしげなる文字もじにて、「びやうさせぬよう」との御言葉ごことばを、見みざるたびもなし、